

メキシコでの研修から

厚生省保険局企画課 丸山 史朗

日墨研修生、学生等交流計画に基づく日本側研修生として、昨年6月から本年3月までの約10か月間メキシコに滞在した。その間、メキシコにおいて、スペイン語研修及びメキシコ・プロパーの問題について研修したわけであるが、その間における研修生活等を含めメキシコという国について私なりに感じた事を少し書いてみたい。なお、同国の社会保障制度についても調べてきたが、それは別の機会に譲りたい。

我々研修生は全体で98名であったが、学生と企業・省庁関係の一部の者を除いてスペイン語を初めて学ぶという者がかなりおり、出発前の約2か月間一応研修を受けたが、実際問題としてほとんど会話をすることができない状態で出発の日を迎えた。

メキシコ到着後約一週間は、メキシコ・シティから車で約2時間程の所にあるオアステベックの国立休暇村で研修生全員の共同生活があり、この間、メキシコで生活する上で必要な事項（政治、経済、社会、文化等）についての講義や映画の上映があった。もちろん、全部スペイン語（映画の一部は英語）であったが、映画を除いて同時通訳がついた。また、同地では、日本人が多勢いたため、食事の時、部屋の鍵を受取る時、洗濯物の依頼の時を除いてほとんどスペイン語は必要としなかった。メキシコにいながら、日本生活をしていたのである。

共同生活をしている間は、概してメキシコ人と話をする事を避け（会話の自

信なく、そうなってしまったのが事実）、ほとんど日本人とばかり生活をしてきた。

共同生活の終りが近づくにつれ、少しずつ不安感が出始め、日本から持って行った本を開き会話練習を少しずつ始めた。まさに一夜漬に近い会話練習であった。研修生は各々、研修地のメキシコ人家庭に下宿することになっていたのので、その前日には、下宿の人に何を話すべきかメモ書して暗記に取組んだ。

この様に努力(?)した暗記も下宿の人に会ってから僅か2.3分で種切れ、さて次はとなると単語が出てこない。悪いことに、相手の言っている事がほとんど理解できず、止むなくノートを取り出してそこに書いてもらった。これが本当のメキシコ生活の第一歩であった。

語学研修は、下宿に入って4日目から本年1月まで行われた。前半2か月間で文法、話法等の基礎が徹底的に行われ、少しずつ会話力が出てきた。それに伴って、メキシコ生活を味わえるようになっていった。現地生活しているのであるから話せる様になるのは当然の事であろう。同時に、9月から大学での研修が始まるとあって、語学研修に必死にならざるを得なかった。

昨年9月からは、語学研修と平行して、大学（国立ポリテクニコ大学経済学部）での研修が始まった。同大学は、日本人の受入れが初めてという事、更に、一挙に13人の日本人という事で、日本人だけを対象とした特別クラスが編成され、メキシコ・プロパーの問題に関する研修が行われた。

こういった事情で、教授が比較的ゆっくりと話をしてくれたのでノートを取るのに最初だけ苦労した位であった。内容も我々の関心を引くメキシコ経済史、経済問題及びメキシコ史であった。特に教科書といったものはなく、自分で本屋に行って適当な本を探す必要があった。大学での研修期間が短かったとはいえ、我々は我々なりに歴史的にみたメキシコ経済の実態をかなりつかむことができたと確信している。

メキシコは周知のとおり未だに経済発展途上国に入り、現在、そこから脱出すべく方途を模索している段階である。しかし、ここで問題になるのは、同国

内には多くの天然資源があるにも拘わらずそれを開発する資本と技術がない事である。メキシコ政府としても、外国資本の導入にかなり力を注いでいるが、その効果はあまり表われていない。同時に、現在、同国の借入金は1976年で約276億ドルになっており、その利子だけでもかなりの金額になっている。これが同国経済発展の上で大きな障害の一つになっている。経済が本格的に発展するのは一体いつ頃からかという事であるが、政府自身の努力にも拘わらず遠い将来の事になると思われる。

経済問題で大きな問題として取り上げなければならないことは、同国の失業問題である。現在、失業問題は世界各国共通の問題であるが、メキシコの場合は特に深刻で、現在の失業率は潜在失業者を含めて50パーセントを超えている。就職状況をみると、いわゆる大学出の学士(Licenciado)と秘書業務に必要な英語、タイプ、速記のできる女性は比較的楽に仕事に就けるが、その他の者は縁故がないと極めて厳しい現実であり、たとえ仕事についても、その労働条件(特に、賃金)が悪い。

メキシコでは最低賃金制度があるが、これはあくまで建前の事である。この最低賃金制度に関して、次の様な興味深い報告書がある。「メキシコ国内産業の規模を見ると、その90パーセントが中小企業である(大企業といわれるのは約10パーセントであるが、そのほとんどが外国資本との合弁企業である)。これら中小企業のサラリーのほとんどは国で定めた最低賃金の額よりも低い。

1971年から1976年の間に最低賃金日額が38ペソから96ペソに154パーセント引き上げられたが、その結果、多くの中小企業が事業閉鎖に追いやられた。一部の経済学者の間では、最低賃金制がメキシコで実施されていなかったら、メキシコ経済は今より発展したであろうと言っている。」

なお、本年1月から、最低賃金日額が102ペソ60センターボ(約1180円)から120ペソ(約1380円)に引上げられたが、前述した通り、この制度は必ずしも守られていない。否、一部の企業を除いて守れないと言った方が妥当かもしれない。

参考までに、メキシコ社会保障庁(Instituto del Seguro Social)の統計による1975年の平均賃金日額によれば、全平均で104.08ペソ(約1240円)、男性が107.81ペソ(約1290円)、女性が91.99ペソ(約1100円)となっている。

メキシコは周知のとおり貧富の差が激しい国である。全体の約80パーセントが貧者といわれており、特に、農村地域に多くある。農民のほとんどがその日暮し的な生活を送っている状態である。

人口問題にしても、その増加率は爆発的(1977年で4パーセント)であり、政府も内政の重要課題として取り組み、国民に家族計画を呼びかけている。そのスローガンは、「La familia pequeña vive mejor(少人数家族は良い暮しができる。)」である。しかしながら、カトリックという宗教上の問題、教育水準の問題からその効果はあまりあがっていない。人口構成をみると、25歳未満の全人口に占める割合が70パーセントとなっている事からもわかるように、これは将来に大きな問題をもたらすのではないだろうか。

メキシコの内政上の問題を少し取り上げただけでも、いかに深刻な状態におかれているかが多少なりとも理解できると思うが、これは、楽天的という国民性によってか、直接我々の膚に伝わって来ない。彼ら自身にしても、特にそれを意識して論じない限り何も話をしない。関心があるのか無いのか良く理解できない一面である。

さて、ここでメキシコのその他について少し触れてみることにする。

メキシコは、面積197万2544平方キロ・メートル(日本の約5.6倍)、1連邦区、29州、2直轄領からなる連邦制である。1970年の国勢調査によると、全人口が約48百万人(1976年が62百万人)、人口密度24.5人となっている。しかし、連邦区(Distrito Federal)の人口密度が約4,674人となっている。この数値は、地方からの人口流入により毎年確実に増加している。

人口の都市集中化は、農業収入の伸び悩みが大きな原因となっている。メキシコの農業は、雨季に最盛期となるが、乾季になると農業そのものがストップしてしまうといった状態である。政府も農業政策の重点課題としてかんがい施

設の拡充を行っているが、思うように進展していない。

一部の地域を除いて地方都市には、産業らしい産業がなく、また、農業がこの様な状態にあるために、今後も人口の都市集中化傾向はますます強まるであろう。しかし、前にも触れた様に、メキシコの失業率が50パーセントを超える中で、これら都市流入組に対する仕事はほとんどない。運良く仕事にありついた者は別として、彼らの多くは靴みがき、物売り、地下鉄・バスの中で歌ったり、あるいは完全にルンペンとなって金をせびってその日の生活をしている。メキシコ人の中には、他人に金をあげるその悦びというか、それに伴う優越感というのがあり、こういった人達は彼らの恩恵にすがりついて生きている。私の場合、ほとんど金をあげなかったが、一度バスの中で日本の歌謡曲を歌ってくれた時—確か日野マリの歌だったと思うが、とても感激して、普通より少し多目の金を渡した覚えがある。

メキシコ市は、東京とあまり変化がない。人口過多、車のラッシュ、地下鉄・バスの混雑、そしてスモッグ。初めの頃は、東京と同じ様な生活で、メキシコらしい生活のできない事に対してとても残念に思ったことがあったが、それも時間が解決してくれた。地方都市に行った人の話を聞いた時、逆にメキシコ市で良かったと思った位である。地方都市の人は、必要な本とか情報がなかなか手に入らず、メキシコ市までわざわざ出かけて来ていた。同時に、とても単調な生活の連続で、非常に退屈していたらしい。その点、メキシコ市は首都らしく、本屋も多くあり、必要な資料はほとんど入手する事ができた。更に、官庁、銀行等からも必要な資料はすぐに入手できるのでとても助かった。

メキシコ市で生活をする場合、特に注意しなければならないのが、交通、治安である。メキシコにも交通法規はあるが、それはただ存在するという位である。運転手のマナーは悪く、常に車優先という観念があり、とても歩行者保護というものはない。交通事故に遇っても、ほとんどが被害者の泣寝入りである。運転手は、人をはねても被害者が生きていればそのまま立去るし、仮に殺してしまっても、せいぜい10万か20万円を払えばそれで事が終わってしまうとの事で

ある。目撃者のいない夜であれば、そのまま逃げてしまい、絶対と言って良い程加害者は逮捕されない。

治安面では、背広を着てビシッときめている場合以外はあまりないが、夜の一人歩き、特に年末はよした方が得策である。地方都市の場合あまり治安上の問題がない事を付け加えておきたい。

メキシコ市を一步外に出ると、そこには別天地がある。スモッグも無く、あわただしい人と車の動きもなく、ゆっくりとメキシコ生活を味わうことができる。ほとんど全ての都市は教会を中心に作られており、中には、植民地時代の町の姿をそのまま現代に伝えている都市もある。同時に、メキシコは「自然と歴史の国」と断言できるほどその自然の雄大さ、美しさ、歴史的遺産の多い国であり、我々をそのとりこにしてしまう。アカプルコを除いて、いわゆる観光地（または保養地）という所は、まさにその言葉にふさわしいものを有している。海は年中泳げるといふ事、人口の割にそれらの場所が多くある事等により海岸にはあまり人がいない。イモを洗うような日本とは事情が大部異なっている。彼らは泳ぐというより、日光浴を楽しむといった方が良いのではないか。休暇も比較的まとめて長くとれるので、家族揃ってゆっくりと静養する習慣がある。

歴史関係の遺産であるが、国内には無数の遺跡が散在しており、それを全部見るとしたら一体何年かかることか。特に有名なのが、メキシコ市北部のテオティワカン、オアハカ州のモンテ・アルバンとミトラ及びユカタン半島のウシュマルとチツェン・イツアである。一人でゆっくり見て歩くのも良いが、団体に加って見て歩くのもよい。後者の場合、要所を見逃がすことはない。また、丁寧なガイドの説明もある。これらの遺跡を見ると、歴史の重さ、その時代の文化の一端を身をもって感ずる事ができる。古代史を勉強したいと思う者、興味のある者にとってはすばらしい体験を与えてくれる。

自然美と前に書いたが、これは日本のそれと格段の差である。思わず足が止まり、それに引き込まれる。開発らしい開発もなく、また、交通の便の関係で

訪れる人も少なく、本当の自然に触れることができ、自然の中に入って楽しむ事ができる。日本でよく紹介されるアカプルコであるが、同地は保養地であって、観光地ではない。近年、訪れる人が多くなり、海は激しい勢いで汚染されている。アカプルコにはアカプルコの良い面があるが、カリブ海に接した人なら二度と行く気をおこさないのではないだろうか。メキシコのこの自然美・遺跡がこのまま永久に保存される事を切に願うのである。

メキシコと聞くとすぐにテキーラとソンプレロ、歌と踊りが好きで陽気な国民性、アスタ・マニャーナの国と云うのんびりした雰囲気や想像される事であろう。しかし、現実はどうか。お祭り、歌、踊りの好きなという点は当たっている。彼らの中には、祭りがあると聞くと仕事も学校もさぼる者がいるのは確かである。一晩中でも踊り、飲む事がしばしばであるが、翌日はちゃんと仕事、学校に行く。楽しむ時には徹底して楽しむ、すべてを忘れてそれに興じるのである。

メキシコ人は、いつもテキーラを飲んで云々であるが、現実には、教育水準の低い者、低所得者の一部を除いて、酒類を飲むのは、土、日と祭りの時だけ、それも家族と楽しみながら飲む。更に、時間的には割ときしっとしている。常に時間を気にし、かなり時間に正確な生活をしている。

彼らの生活で常に優先するのが家庭であり、彼らは生活する為に働くという印象を受けた。家庭を犠牲にしてまで働くということはない。

メキシコに行った当初は、言葉の面での苦勞もさることながら、常に日本的な考え方を前面に押し出してメキシコを批判したり、メキシコ人と接したため失敗したことがあり、とても反省している。しばらくの期間が経って、それでは本当の意味でのメキシコ生活を送れず、メキシコを知ることが困難であるという事に気が付き、できるだけ彼らの考え方、生き方を見て、それに合わせるようにしていった。その結果、それまで胃の痛くなる思いをしたことがまるで嘘であるかの如く変化し、また、彼らも心を開いて私に接してくれるようになった。「郷に入らば郷に従え」という格言どおりである(この頃になって言葉

の面での問題が少くなり、誤解が解ける様になった事もひとつの原因とされている)。

こうなってくると、友人はどんどんでき、それに伴って生活が楽しくなって、あたかも自分がメキシコで生まれたかの如く錯覚することしばしばであった。これによって、私の現地生活は、到着当初と比較にならぬほどすばらしいものとなっていった。

スペイン語を通して彼らの生活、社会、経済等を知るにつれ、確かに批判することはあったが、それ以上にメキシコという国を愛し、メキシコ人を愛することができ、私なりにこの研修期間でとてもすばらしい体験をすることができた。メキシコ生活の終りが近づくとつれ、とてもつらい、胸をしめつけられる様になった。そのまま残りたいと何回思ったことか。離墨の日には、後髪をひかれる思いで飛行機に乗ったのである。

最後に、メキシコ人社会では、排米思想がとても強いが、日本(又は日本人)に対しては常に尊敬心を持ち、我々を信じている。これは、在メキシコ日本人が長い間かかってその社会に築いてきたものである。滞墨中は、その信頼関係を裏切らないよう十分注意していた。今でも、これを常に心がけ、彼らと交際をしている。日墨関係の発展のために、我々は努力していかなければならないのである。今後、日本人がどんどんメキシコを訪れることと思うが、どうかメキシコ人社会にこういうすばらしいものがある事を認識して彼らの中に入って行ってほしい。